仙 台 大 学 紀 要
Vol. 50, No.2: 39-60, 2019

「教育の質の向上」の視点からの体育系大学における英語教育の新しい試み（第一報）

朴澤　泰治　　菊地　　博　　鎌田　幸雄
M.キーナート　　J.パランギ　　山口　貴久
M.マンキン　　石田　照規　　伊東　宏之

仙台大学紀要
Vol. 50, No.2: 39-60, 2019

学会等報告

「教育の質の向上」の視点からの体育系大学における英語教育の新しい試み（第一報）

朴澤　泰治　　菊地　　博　　鎌田　幸雄　　M . キーナート　　J. パランギ
山口　貴久　　M . マンキン　　石田　照規　　伊東　宏之

Taiji Hozawa, Hiroshi Kikuchi, Yukio Kamata, Marty Kuehnert, Jerry Parangi, Takahisa Yamaguchi, Mchael Mankin, Teruki Ishida, Hiroyuki Ito : A new attempt to the English Education Method of P.E., as a view point of improving the quality assurance framework of Higher Education (first report) : Bulletin of Sendai University, 50 (2) : 39-60, March, 2019.

KEYWORD Education by proficiency level, Sports rules written in English,The quality assurance framework of Higher Education, The administration of Education Method with Information Technology System

キーワード 習熟度別教育，英語とスポーツルール，教育の質保証，ＩＴを活用した教育方法管理

はじめに

競技スポーツのルールには英語が多い。日本由来の柔道も国際的には「JUDO」である。従って、競技スポーツ選手あるいはスポーツを様々に支える人材にとって、英語は必須の外国語である。一方、初・中等教育時代にスポーツに取組んでいた若者達は、英語授業の時間は、放課後の部活動のための「休息の時間」となってきた現実もある。彼らも、自己が専攻するスポーツにおける英語由来の用語については、由来を知ってか知らずか、意味を理解し、使いこなしている。そして、大学生となっても、英語と専攻領域たるスポーツの実践との関係を探求する意識で英語授業に取り組んでいる学生は少数派に属する。これは、以下の取組みに携わる者が所属する仙台大学においても同一傾向にある。

グローバル社会が喧伝されるなか、英語に馴染みやすいスポーツというものを専攻領域とする大学としては、他の領域にもまして、より意義のある英語教育を展開していく使命を持つといっても過言ではない。本稿で示す取組みは、体育系大学としての英語授業に教育方法の工夫・改善方策を導入することにより、大学教育改革で求められている「教育の質の向上」を踏まえた実効性ある英語教育の定着を目指すという視点から取組んでいるものであり、本稿は、その第一報である。

初・中等教育における英語教育改革の動向は、後記のとおり、2018年度以降、仙台大学に入学してくる学生から本格化してくると同時に、2014年12月22日付中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」の具現化と併せ、ＰＤＣＡサイクルによる具体的数値目標を伴った改革が大学教育においても要請されるところとなっており、本取組みは、これらの背景動向と一体的な先進的試みとして位置付けることができる。

また、この動向は、教員養成を一つの柱としている大学教育としても、育成した人材が就業する学校という就業現場自体の変化に対しての

対応が迫られているところともなり、保健体育教員の養成面でも、現場教員の英語力のみならず全体的な資質の向上に向けての先導的な取組みになると考えられる。

1．背景としての教育行政

最初に、近時の高等教育あるいは英語教育に関する教育行政動向を概観する。

⑴　2018年12月中教審答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」

最新の高等教育をめぐる中教審答申において、「高等教育機関の国際展開」と題して、「我が国の高等教育機関の教育研究力の向上や国際通用性を強化し、特に高等教育が拡大し、学生の雇用市場としても拡大が予想されるアジアを含めた海外からのアクセスを向上させることで、世界に開かれた高等教育機関として期待される役割を果たすことが必要である」とされ、「保証すべき教育の質」として、「何を学び、身に付けることができるのかが明確になっているか、学んでいる学生は成長しているのか、学修の成果が出ているのか、大学の個性を発揮できる多様で魅力的な教員組織・教育課程があるかといったことは、重要な要素となる。」とし、「教学マネジメントの確立に当たっては、大学が、学生の学修成果に関する情報や大学全体の教育成果に関する情報を的確に把握・測定し、教育活動の見直し等に適切に活用する必要がある。」とされた。

⑵　2018年6月閣議決定「教育振興基本計画」

高等教育を含む生涯にわたる教育の振興に係るバージョンアップされた「教育振興基本計画」では、高等教育段階の目標の一つとして「問題発見・解決能力の修得」が掲げられ、「高大接続改革の着実な推進」として、「学力の3要素を確実に育み、多面的・総合的な評価を行うため、高等学校教育・大学入学者選抜の一体的な改革を進めることとし、各大学の策定する3つの方針を踏まえた教育改革を促進すること」とされ、また、社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成する目標の一つとして「グローバルに活躍する人材の育成」が掲げられ、英語力については、「中学校卒業段階でCEFRのA1レベル相当以上」、「高等学校卒業段階でCEFRのA2レベル相当以上」を達成した中高生の割合を5割以上にするという具体的数値が明記されている。

⑶　グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言

上述の中教審答申や「教育振興基本計画」で示されている英語教育に係る改革の背景として、2013年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が制定され、その具体化のため、2014年に英語教育の在り方に関する有識者会議が設置され、次の5つの改革が提言された。

• 改革1. 国が示す教育目標・内容の改善

学習指導要領では、小・中・高を通して、各学校段階の学びを円滑に接続させること、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標を示し、高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。具体的には、小学校では、中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高め、高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養い、学習の系統性を持たせるため教科として行う。中学校では、身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養い、文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション能力の養成を重視する。高等学校では、幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に体験し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を高める。

• 改革2. 学校における指導と評価の改善

英語学習では、中学校の学びを高等学校へ円滑につなげる観点から、中学校においても、生徒の理解の程度に応じて、授業は英語で行うことを基本とする。

• 改革3. 高等学校・大学の英語力の評価及び入学者選抜の改善

入学者選抜に、4技能を測定する資格・検定試験の更なる活用を促進する。

• 改革4. 教科書・教材の充実

• 改革5. 学校における指導体制の充実

小学校の学びを中学校へ円滑に接続させるため、小中連携の効果が期待される相互乗り入れ授業、カリキュラムづくり、指導計画作成などを行う合同研修など実質的な連携を促進し、小学校における英語指導に必要な基本的な英語音声学、英語指導法、ティーム・ティーチングを含む模擬授業、教材研究、小・中連携に対応した演習や事例研究等の充実などを大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善を通じて図る。

⑷ 大学における教育内容等の改革状況調査

毎年度、私立大学等を対象とする「大学における教育内容等の改革状況について」の調査結果が公表されているが、2018年度の「グローバル人材育成と大学の国際化の状況」においては、「外国語教育の実施状況」として、「英語教育に関して、以下のような取組を行っていますか」との設問で、「会話中心、速読中心等目的別クラス編成」、「能力別クラス編成」、「ＩＣＴの活用」、「ネイティブ・スピーカーの活用」、「TOEFL、TOEIC、英検等に必要な能力の養成を目的とした科目の開設」等が設定されている。また、「外国語教育に関して、在学中に学生が身につけるべき水準について、何らかの達成目標を設定していますか」との設問で、「英語について、TOEFL、TOEIC等外部試験のスコア等を到達水準の１つとして設定している」、「英語について、外部試験のスコア等以外の到達水準を設定している（大学独自で定めている到達水準を含む）」等が設定されている。さらに、「英語による授業の実施状況」として、「学部または研究科の授業科目で、外国語のみにより（日本語を併用せずに）授業を行っているものがありますか（外国語教育を主たる目的としているもの（例：英語演習）は除きます）」、「英語による授業科目のみの履修で卒業または課程を修了することができますか」等の設問が設定されている。

⑸以上、要すれば、これらの行政動向をどう捉えるかである。

すなわち、「体育系大学とは無関係な教育行政動向である」と捉えるか、「体育系大学にも密接に関連する動向である」と捉えるかである。我々は、この動向は、体育系大学教育に密接に関連しているとの発想のもとに取組んでいる。

２．本取組みの概要（新しい英語教育体系の内容・背景・狙い）

⑴ 従来の英語教育体系の概要と評価

従来の仙台大学の英語教育は、これを教養教育のなかに位置づけ、「教養基礎科目」として英語科目を必修1科目2単位、計2科目4単位を1年次のカリキュラムの前期・後期に配当するとともに、2年次以降は選択科目群として「海外文化科目」を設置し、いずれも履修学生に対して、1コマ（90分）の均一の教育内容で授業を展開してきた。これによれば、英語教育については、1年次で必修分4単位を単位取得すれば2年次以降は英語に触れることなく卒業する学生が出現するところとなっていた。

初・中等教育時代に、学校体育としてのスポーツ部活動に勤しんだという経験を仙台大学学生の大半が保有しており、その反動として、初・中等教育の英語授業が「休息の時間」と化してしまった者が、従来の英語教育体系では、基礎英語力が不足のまま大学での専門教育の学修で英語に取組まなければならないという状況、基礎英語力不足が嵩じて英語に背を向ける姿勢のところに初・中等教育と同様の英語教育の授業展開を強いられ、殻を閉ざす「貝」の如く就学断念にまで追い込まれる状況、均一的内容のた

め低レベルの英語教育の授業展開に飽き足らなくなる状況、等が現出するところとなった。

また、「学生のうち、英語力の一番ある時期は、入学直後の１年生の時期である。この時期を逃さないような形で、１年生から英語を必修として学習の習慣をつけるのは不可欠である。まともに英語の力を有していると判断できる者は、１割程度であり、それ以外の９割の多くは、全く英語が分からないか、本当に基礎的な中学英語から始めなければいけない者が大半である。換言すれば、英会話、ヒアリングなど全く無理、読解力なし、英作文力ゼロ、単語力はすぐれてゼロに近い、というのが実態である。以上に加え、これが２～４年になると英語との接点は全く無くなり、ほぼ、能力は全てゼロに近くなるとみてよい。」といったシビア―な見解も見られた。

本取組みは、これらの状況を打開し、将来の目標達成のためスポーツ科学という専門領域で希望をもって勉学に取組める環境をより整備する方策の一つとして、スポーツと英語との関係を明確化した英語教育の新しい体系を構築しようとするものである。

⑵　従来体系からの移行に関する幾つかのキッカケ

教養教育の一つに位置付けている「全学教養演習」は、各専任教員が、一般教養としての自らの興味関心をテーマ化し、学生に選考させて共にテーマを掘り下げていくという授業であるが、この授業のテーマ群のなかに、従来の英語教育の枠組みを超えたものが見られた。具体的には、「Introducing your PE experiences in English」、「Japanese Sports : A Historyの翻訳と輪読」、「英字新聞のスポーツ・文化欄を読む」、「スポーツエコロジー＆外国語」「Watching Sports in English 英語でスポーツ観戦」、「TOEICのスコアをアップしよう」等であり、大半が英語担当教員以外の教員群のテーマであった。これらは、各教員が専攻領域に関する授業展開で学生の英語力不足に悩まされていることを窺わせるものでもある。

他大学の英語教育では、次のような展開が見られ、体系移行の参考となった。

- Ｔ大学　教養教育としての総合科目制度における「スポーツ」
  基礎科目（共通科目）における外国語としての英語
- Ｗ大学　英語６単位　コミュニケーション６～20単位
  スポーツ英語　Ａ（メディア）Ｂ（種目別）Ｃ（会話）Ｄ（文献）
- Ｎ大学　基礎英語・英語コミュニケーション・医療英語・ＡＴ論基礎・応用英語
  基礎英語（10コマ／週）・英語コミュニケーション（11コマ／週）　教員数21名
- Ｏ大学　単位数１単位（必修４科目）　海外語学研修（1単位・２年・選択）

⑶　新しい英語教育体系

新しい体系では、「教養基礎科目」・「海外文化科目」の位置づけは同一とし、英語科目必修4単位の教育方法、および選択科目群の科目構成を大幅に改定し2017年度から開始した。

新体系を時系列的に図式化すると、次の系統図になる。

		必修科目		選択科目	
学年	期		単位		単位
1	前	導入演習（２コマ） 体育系大学の基礎教養（２コマ）			
	後	総合英語Ａ （含外国語コミュニケーション）	1	スポーツに何故英語が必要か	2
2	前	総合英語Ｂ（同上）	1	英会話Ａ	2
	後	総合英語Ｃ（同上）	1	英会話Ｂ	2
3	前	総合英語Ｄ（同上）	1	英会話Ｃ スポーツ＆イングリッシュ	2
	後			就職のための英語	2

必修の英語科目については、入学時の英語力確認テスト（プレイスメント・テスト）結果に基づき習熟度別にクラスを少人数で編成し、実力レベルを5段階（授業展開上は8段階に細分化）に分け、レベル毎に難易度を変えた授業を、「総合英語Ａ（含外国語コミュニケーション）」から「総合英語Ｄ（含外国語コミュニケーション）」という必修科目名称として、1年次後期から3年次前期まで2年間にわたり実施する。必修4単位については、1コマを45分と半減し、1科目1単位、計4科目4単位として、2年にわたって半期単位に連続して授業を配分することとした。

選択科目群については、一コマ（90分）2単位科目として、１年次後期に「スポーツに、何故、英語が必要か」、2〜3年次に「英会話」3科目、3年次に「スポーツ＆イングリッシュ」、3年次後期に「就職のための英語」を設置することとした。この他、１年次配当の必修科目である教養基礎科目の「導入演習」、教養展開科目の「体育系大学の基礎教養」においても、英語教育の導入に資する事項を授業内容に組込むこととした。

以上の新体系による英語教育と、同時並行で導入を進めている「英語による専門科目の授業実施」と相俟って、初・中等教育からの英語教育改革、および、高大接続改革という教育行政動向に対応しようとするものである。

⑷　学生への説明周知

4年間にわたる英語教育体系の一覧表は、前掲の通りであり、各科目の学生に対する実施内容は、次の通りとした。

①「導入演習」と「体育系大学の基礎教養」

「導入演習」では、第3回目の授業で仙台大学の英語関連科目のカリキュラムを説明し、第4回目の授業でプレイスメント・テスト（クラス分けテスト）を実施する。

「体育系大学の基礎教養」では、第5回目の授業で「総合英語Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」を取上げ、日本における英語教育の考え方・制度変更について、および必修科目での履修の考え方・方法を理解させるとともに、授業担当の各クラス担任からスポーツと英語に関する自己体験についてそれぞれ何項目か披瀝することにより、共通資料により、職業と英語の関わりおよび今後の社会生活における英語の必要性を理解させる。

②　必修科目たる「総合英語Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」

英語の４技能（「読む」・「書く」・「聞く」・「話す」）の総合的能力の向上、併せて英語でのコミュニケーションの基本的能力の向上を目指す。入学時にプレイスメント・テストを実施し、その結果に基づき5段階の能力別少人数クラス（体育学科単独および他学科合同で各6クラス、1クラス約20名〜25名）を編成し、各クラスでは、それぞれの目標に応じた内容の授業を行う。毎回、確認テストを行い、その合計、および後記の自学自習によるＩＴを利用した「学習システム」での獲得点数によって成績を評価する。クラスの学習内容・目標のレベルは次の8段階とする。

レベル１　日常生活の基礎的英単語を修得する
レベル２　スポーツに用いられる英単語を修得する
レベル３　英検４級レベルの基礎的英文法を修得する
レベル４　英検３級レベルの基礎的英文法を修得する
レベル５　英検準2級レベルの英文法を修得する（TOEFL iBT 40〜56）
レベル６　英検2級レベルの英文法を修得する（TOEFL iBT 57〜86）
レベル７　英検準１級レベルの英文法を修得する（TOEFL iBT 87〜109）
レベル８　教員採用試験レベルの英文法を修得する（TOEFL iBT 110以上）

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ各科目の履修時期は次のとおりとし、総合英語ＡからＤに進むにしたがって、５段階の目標のレベルが一段階ずつ上昇していくこととなる。

科目	履修時期	授業内容
総合英語Ａ	１年後期	レベル１〜レベル５
総合英語Ｂ	２年前期	レベル２〜レベル６
総合英語Ｃ	２年後期	レベル３〜レベル７
総合英語Ｄ	３年前期	レベル４〜レベル８

③　選択科目群

(i)「スポーツに何故英語が必要か」：米国大学卒業者および英語圏諸外国勤務経験保有者から、それぞれの資格取得を含む留学等の滞在経験について、それぞれ１～２コマ程度披瀝してもらい、スポーツに何故英語が必要かについて認識させる。

(ii)英会話科目：「英会話Ａ」初級系・「英会話Ｂ」中級系・「英会話Ｃ」上級系

(iii)「スポーツ＆イングリッシュ」：スポーツ映画を題材とし、スポーツに関連した言葉が日常慣用句になっている例を多数紹介し、より高い英語学習へのモチベーションを促す（人数限定）。

(iv)「就職のための英語」：公務員・公立学校教員その他の英語試験を要する職種への就職に有利な英語力を習得させる（人数限定）。

(5)　補完的措置の実施内容

新英語教育体系では、その効果をより確実なものとするため、次の通り、幾つかの補完的な仕組みも導入した。

①　必修科目「総合英語」の習熟度別授業に関しては、他大学では、習熟度レベル別に授業科目自体を必要数設定して実施する場合が多いのに対して、仙台大学では、これを４科目に集約して教育する体系であるところから、習熟度のレベル管理等について、ネイティブスピーカーの専門コーディネーター（名称は英語教育アドミニストレータ）を配置し、ＩＴを活用して次の業務を担当させることとした。

- 学生証番号と連動した全学生の該当科目に関する、次の情報などを収集管理
  ＊プレスメント・テスト結果
  ＊習熟度レベル　　＊所属クラス
  ＊授業担当教員情報
  ＊授業出席状況　　＊確認テスト結果
  ＊成績評価　　＊レベル変更の検討　etc
  （収集管理システムは情報システム室と共同開発）
- 個々の学生に対する習熟度状況のフィードバック業務、および、専任担当教員との連携による個々の学生の進路等目標に関する達成へのアドバイス業務
  具体的には、苦手意識の学生に対しては、授業欠席回数の増加に対する警告アラーム、その一方で、好成績の確認テスト結果に対する称賛絵文字を、自動的にメールで対象学生に送信するシステムを導入した。称賛絵文字は、当然、英語力向上に熱心な学生にも発信され、成績最上位クラスには、何らかのＡＷＡＲＤの授与を予定している。
- レベルの括り変更に関する基準などの検証・構築

②　従来から導入している自学自習によるＩＴを利用した「学習システム」の活用を促進するとともに、活用成果を「総合英語」の評価に加味させることにより、事前・事後学習への取組み意欲の醸成を図った。

③　専攻領域のスポーツは、英語と密接な関係を有するところから、継続的に取組みやすい必修英語教育を具現化するため、「総合英語」の教材の題材にスポーツの話題を積極的に取入れた。すなわち、アルファベットや単語学習レベルのクラスから、TOEIC・TOEFLでの得点力向上を目指すレベルまで、スポーツの話題に関する同じ材料から、競技別のルール・専用用語等のスポーツ単語の習熟、Pen-Pineapple-Apple-Penレベルの英文法その他、系統的に学習内容を材料から抽出し教材化した。向上心のある学生も、英語に全く興味を示さない学生も、スポーツに関する興味を通じて必修授業に取組むという姿勢を醸成するためである。同時に、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄと段階を踏むごとに、教材を冊子にまとめ、英語教育にＰＤＣＡサイクルの取り込みを図った。

④　4年間にわたる英語教育体系の一環としての選択科目群については、「スポーツに何故英語が必要か」に始まり、「就職のための英語」の履修に至る、という学士力・就業力が伴った社会人育成のための系統的な選択科目の履修体系を構築した。選択科目については、成績優秀者に対して海外留学等の資金面その他で何らかの優遇措置を講じる等の意欲喚起策を措置することも検討している。

⑹ 選択科目「スポーツに、何故、英語が必要か」の設置

体育系大学の英語教育必修科目を補完する授業として、「スポーツ科学を専攻する学生にとって、如何に英語が必要なものかを知覚させることにより、大学教育として必修科目に位置付けられている英語教育課目への学生の取り組みを真摯化すること」を目標とした、2単位の選択科目「スポーツに、何故、英語が必要か」を設置した。

担当者には、専任教員のなかから、英語圏ネイティブ・スピーカー、英語圏海外勤務経験者、および英語圏海外大学卒業者・大学院修了者を選定した。幸い、中央官僚出身で在米大使館勤務経験保有者、米国支局長経験保有者のジャーナリスト、スポーツの本場の米国で、アスレチック・トレーナー資格取得等のための留学経験保有者など、学生にとって、英語との関わりについて有意義な経験談を聞くことができる人材が、多数、在籍しているので、提供材料には事欠かない状況にある。講義内容は、基本的には個々の体験談披露と英語力強化への助言とし、評価方法は、レポート（60％）、ポートフォリオ（40％）とした。レポート課題は、「自己が目標としているスポーツ分野における英語の必要性と今後の英語科目への取り組みについて」に統一した。

末尾に、初年度の各担当教員の提供話題を示す資料を添付する。

３．本取組み発足後の状況

本稿では、新しい英語教育体系の概要・狙いなどを主体に整理しており、学生の履修状況その他、発足後の状況に関する統計的エビデンスは第二報であきらかにすることとして、以下に、発足後の若干の状況を整理する。

(1) 導入当初における補完的措置の状況等（開始初年度）

「総合英語Ａ」履修者全体のレベル毎のプレイスメント・テストの平均点は、次の通りであるが、レベル別の状況に格別の特徴は見られなかった。

		人　数			平均点		
		体　育	体育以外	計	体　育	体育以外	計
全体	レベル１	50	40	90	28.8	31.4	30.0
	レベル２	61	51	112	39.1	40.6	39.8
	レベル３	136	115	251	50.6	52.1	51.3
	レベル４	46	46	92	63.5	64.5	64.0
	レベル５	39	37	76	75.4	77.5	76.5
	合計	332	289	621	49.9	52.4	51.1

「スポーツに何故英語は必要か」は、「総合英語Ａ」の総履修者６２１名のうち、１６５名が履修した（最終確定前集計）。また、ＩＴを利用した「学習システム」のレベル別の利用度合は、次の通りであった。

		体　育					体育以外					合　計				
		秀	優	良	可	不可	秀	優	良	可	不可	秀	優	良	可	不可
利用率	レベル１	100.0	30.0	8.3	0.0	0.0	0.0	15.3	11.1	0.0	0.0	100.0	23.2	9.5	0.0	0.0
	レベル２	100.0	29.2	9.1	0.0	0.0	100.0	62.8	36.1	0.0	20.0	100.0	44.7	21.2	0.0	11.1
	レベル３	100.0	68.4	39.5	35.3	0.0	100.0	50.0	11.5	40.0	0.0	100.0	61.5	24.2	37.5	0.0
	レベル４	100.0	57.9	26.6	50.0	0.0	100.0	60.0	21.4	0.0	0.0	100.0	59.1	24.1	33.3	0.0
	レベル５	100.0	46.1	41.6	0.0	100.0	100.0	73.3	45.4	0.0	33.3	100.0	60.7	43.5	0.0	50.0
	合計	100.0	48.1	30.1	36.8	4.3	100.0	51.1	19.2	33.3	11.1	100.0	49.5	24.6	35.1	7.3

「秀」は「学習システム」利用が前提であり全て100％となる。レベル5で利用率が高いにも拘らず単位取得できなかった者が存在しているが、単位取得は出席が前提になっており、出席度合の関係で単位取得できなかった者である一方、授業受講による英語力向上をあまり期待していないとの推量も成り立つかもしれず、制度設計に一石を投じるものかもしれない。

(2)　実施状況評価

導入初年度を経過した時点で、「総合英語」授業担当教員等の感触について、授業管理の立場（英語教育アドミニストレータ・授業管理システム担当・教育企画担当）、教材作成の立場、授業担当の立場、およびネーティブ・スピーカーの立場から、それぞれの感触を、各担当者作成資料の骨子を引用することにより、以下に、整理する。

(i)　授業管理の立場

○　英語教育アドミニストレータ

2017年の初めから現在に至るまでの新英語教育の目標は、あらゆるレベルで英語を学習する学生にとって、自ら英語学習に取り組みながら総合的能力の向上に結びつけることを目標としています。第二言語として英語に積極的に取り組むことは、社会へさまざまな良い影響を与え、世界に手を差し伸べる力を身に着けることを目指し、学生の将来の道を開くための道具となります。プレイスメント・テストの得点、eラーニングの得点、および出席点の結果は、3週間ごとに学内掲示により発表され、学生に周知されます。学生はこの情報をもとに自分の進捗状況を確認しながら、単位取得に向けて学習に取り組みます。総合英語の出席ポリシーを満たしている学生には単位が認められますが、無断欠席が6回以上有る学生は不可となり単位は認められません。ここで英語教育アドミニストレータは、学生に、第一回目の情報発信として無断欠席が3回続く場合、学生には、大学のアカウントのメールを利用し、頑張るように声掛けをします。その後4回・5回の無断欠席の際には警告として出席するよう促します。学生の出席状況情報は英語教育アドミニストレータ→情報システム室→各「総合英語」の関係者→学科のクラス担任→学生という流れで情報連携を図り、「総合英語」の各クラスに割り当てられている担当教員は、無断欠席に関する情報を学生に連絡して、学生に出席について警告するよう通知します。「総合英語」に関する質問がある場合、学生は英語教育アドミニストレータに連絡するようオリエンテーションなどで通知されています。上記の欠席問題や学生へのケアは、今後、さらに進展します。 第2年度から、学生にとってより一層便利で早いフィードバックシステムが導入されます。成績不振についてのフィードバックだけではなく、意欲を持って取り組んでいる学生のさらなる後押しとなるフィードバックをすべての学生のＥメールアドレスに送信します。絵文字を使用した日本語および英語でのフィードバックにより、学生は自身の進歩を知ることとなり、目で見える成果はさらに学生のやる気を引き出し、急激な進歩につながることでしょう。毎週検索されたデーターは更新され、教職員と制度設計面から「総合英語」に関わる全員に送信されます。収集されたデータに基づいて学生の進歩を追跡するために、「総合英語」の関係者チームでは、毎月、会議が開催されます。出席記録とすべてのレベル間の進捗状況は、関係者チームによって調査分析されます。

○　授業管理システム担当

「総合英語」開講時から、学生の管理および先生方の分析に役立つ管理表を整備してきた担当として、現時点での概要を以下の通り、報告いたします。

作成アプリケーション：• Microsoft Excel2016
使用言語：• Visual Basic for Application
機　　能：
• 学生データ蓄積→各年度、各科目、クラス毎に学生データを蓄積
• プレイスメント・テスト分析表作成
→学科毎の得点分布および偏差値分布作成
→設問の難易度による傾斜配点可能
→体育学科とそれ以外の学科に分けて順位付け

を行い、クラス分けの元資料として活用
- 確認テスト登録
→各回の確認テストの結果（マークシート処理後）を自動で学生データに登録
- 総合英語クラス別学生一覧表作成
→無断欠席回数が３から5回までは無断欠席した得点欄が全て黄色に、6回以上欠席した場合は無断欠席した得点欄が全て赤色に設定
→確認テストと語学学習システムの換算得点の合計を算出し、暫定評価を自動表示
- クラス担任別学生一覧表作成
→無断欠席回数が３から5回までは無断欠席した得点欄が全て黄色に、6回以上欠席した場合は無断欠席した得点欄が全て赤色に設定
- 仙台大学メールを利用した学生へのフィードバック（2019年度運用開始）
→指定した無断欠席回数以上の学生に、指定した文言のメールを自動送信
→指定した回数（最低3回）以上を、最新回から連続で満点（20点）とった学生に賞賛メールを自動送信

【処理用の学生データ】「総合英語」開講時には、必要な情報が何であるかから始め、そこからどのように管理するか？についても運用しながら検討するという進め方のため、随時、機能や項目の追加を行っている。蓄積されたデータをプログラムで扱う観点から言えば、機能等を決め、それに伴い扱うデータを確定した後プログラミングと言う順番であるが、「総合英語」が新たに開講された科目であり、また、授業の手法等についても運用しながら改善を検討するスタイルのため、扱うデータや機能もこういった進め方となる。その結果、製造したプログラムの途中に処理を追加する、と言うことが発生しているが、「総合英語Ｃ」まで終了した時点で、項目数はシステムで利用する項目を含めて135項目、その中には必要に応じて式で設定している項目もあり、この管理表以外に利用しているアプリケーションがあると、稀にメモリのオーバーフローを起こすこともある。今後についてだが、まずは「総合英語Ｄ」までは現状の手法で進め、終了した時点で、再度、機能および項目についての確認を行い、データ量や機能について再評価を行った上で、簡易データベース（Microsoft Access）への移行も視野に入れる。

【機能】分析等の機能は表計算であるエクセルの得意分野である。必要な機能はヒアリングを行い、プログラミング後に専用のシートを作り、ボタンクリックで実行するようにしているが、このプログラミングを簡単に言うと、手でエクセルを操作していたのを自動で行うようにする、と言うのが主たる処理となる。しかし、更に細かな条件分岐や連続処理等が必要になる場合もあり、その場合、手で操作するためには、別途電卓やメモ帳が必要になる。これらを全てプログラム内で処理し、利用者は必要な結果のみ取得できるようにするのが、ここで言うプログラミングと言うことにする。こうして実装してきたが、今回の機能の中で、メールを利用したフィードバック機能だけはエクセルの得意分野からは外れている。この機能だけはエクセル単体では起動せず、マイクロソフト社がインターネット上に公開している機能をプログラム内から参照し、その機能を利用することにより実現しているため、インターネットに接続できる環境下でなければ稼働しない。更に、メールが機能する環境は、エクセルが機能する環境とは全く別物であり、メールを送信することは出来ても、エクセルの機能（指定方法）で文字の装飾を変更することはできない。それを実現するためには、それ用のプログラミング言語があり、それをエクセル内で指定するようプログラミングする必要があり、また、メールと言う機能は、ハードウェアならPCだけではなく、スマートフォンやタブレット等、ソフトウェアならWindows、MacOS、iOS、Android、他、と多種多様のもので稼働するため、全てに同じように動作させるためには、同じ機能を、必要なハードウェアおよびソフトウェア、更にはインターネット閲覧用ソフトウェア（ブラウザ）に分けてプログラミングする必要が出てくる。これらのことから、今回の機能としてはプログラム内で必要な条件に一致した対象の者に自動でメールを送信するだけに留まっている。今後については、必要な機能を追加することは勿論だが、特にシステム担当としては、処理速度向上も併せて考えていき

たい。当初、科目毎に管理表を作っており、データ量についても1学年に再履修生を合わせた量であったため、相応の処理速度を確保できていたが、途中から「総合英語」ＡからＤまでを管理表一つで管理するように変更したため、特にエクセルの機能としての自動計算処理を実行した際、「応答がありません」と表示される程、遅くなった。これは、表内に式が多いため、全データを一気に処理する時にPCの能力の全てを使い切ってもその処理に手間取るために起こる。最終結果は得られるが、これらの状態を改善する必要はある。管理表の利便性は、単純にプログラミングだけの問題では無く、データをどのように蓄積するか？利用するアプリケーションは何にするか？等から始まるものであるため、「総合英語Ｄ」終了後には、今までの経緯を加味しつつ、更なる向上を図りたい。

○　教育企画担当

事務的に対応が必要となったことは、教室の確保である。90分の授業時間を5時限まで設けている。担当教員から90分の1時限の中で1人の教員が45分ずつ2クラス教える方法がないか相談されたときは、何を言われているのか理解するのに時間がかかった。前半と後半の2クラスを同教室で実施すれば、学生が入れ替わるために時間を割いてしまい、授業時間の確保が難しくなる。この打開策が、90分を前半と後半の2クラスに分け、前半45分の授業が終わると教員が隣接した後半クラスに移動して教えることであった。しかし、この方法を実践するには教室の数の確保が絶対条件となった。さらに、「総合英語」で使用する教室は小教室であり、教員が移動する別の小教室が隣接している必要があった。教室の数には限りがあり、「総合英語」以外の授業も同時間に実施されている。「総合英語」以外の同時限開講科目担当教員には無理を言って教室変更を呑んでもらったこともあった。この調整が非常に困難であった。もう一つの困難が、これまで1年次の前・後期で開講していたものが3年次前期までの開講となった点である。本学では前年度の時間割を基本として、翌年度の時間割を作成している。時間割も少人数クラス推奨のあおりもあり、かなりタイトとなっていた。そこに、2年次前期・後期、3年次前期に必修科目が追加されたことは、これと同時間に科目を配置できないことを意味しており、大幅な時間割の配置転換が必要となった。以上が授業管理をする教育企画室の立場から苦労した点であるが、2019年度開講の「総合英語Ｄ（含外国語コミュニケーション）」の時間割編成も無事に組むことができた。あとは、英語教育の完成年度を迎えたときに、学生の学修成果の向上が検証されることを望む。

(ii)　教材作成の立場

○　［レベル１］

レベル１は日常生活に必要な単語やスポーツに関する単語を学ぶことを目標としている。各回の授業は次のような３つの部分で構成されている。①スポーツに関することや日常生活で必要な表現を英語で表現する②スポーツに関する日本語の記事を学び、同時に記事中に出てくる表現を英語にする③上記①②に関する20ポイント満点の確認テスト。

①のパートは日常生活で使う基礎的な単語をはじめスポーツに関する様々な表現も学ぶことを意図して教材を作成した。中学校英語教科書等をはじめ、スポーツに関する大学生用英語テキストなども参照しながらオリジナルなものを作った。

②については、日本語でスポーツに関する歴史や出来事について書いてある記事を読んでスポーツに関する見識を広めながら、同時にスポーツに関する英語の語彙を増やせるように教材を作成した。雑誌「選択」に2015.3月～2016.4月まで連載された中村計氏の「誤審のスポーツ史」を使い、2回程度で1話が読み終わる構成とした。毎回10個程度のスポーツに関する英語表現を調べる教材とした。

③については、授業中に覚える時間の確保に努めることを前提として作成した。

○　［レベル2］

主として総合英語レベル2の教材作成を担当しました。レベル2に関するクラスの学習内容・目標は「スポーツに用いられる英単語とイディ

オムを修得する」ことである。従ってその目標に沿った内容の教材を作成することが求められた。教材は様々なスポーツのテーマに沿って、１回目から12回目まで学習する。45分の学習の中で求められているのがアクティブラーニングのアプローチである。スポーツを教材としたアメリカのスポーツイディオム・熟語や単語の日本語訳は？この単語が使われるスポーツ競技を列挙して、全て同じ意味で使われているか学習する（スポーツの場面と一般的な場面でも）。45分の授業後半では前半と同じ様にアクティブラーニングのアプローチになっている。スポーツを教材とした日本語記事から英単語を修得する。45分の授業の流れはその日のテーマの説明と練習に35分、確認テストに5分、採点とマークシート記入に5分という構成になる。教材は35分でその日のテーマの説明と練習ができるように配慮し、確認テストは5分で解答できるように配慮しなければならなかった。学生は授業の構成に慣れるのに2～３週間掛かったが、授業全体として充分な時間を確保出来た。スポーツ関連として取り上げられたテーマに学生たちは興味を示した。

○　［レベル3＆4］

主としてレベル3とレベル4の教材作成を担当した。レベル3のクラスは「英検4級レベルの基礎的英文法を修得する」ことが学習内容・目標であり、レベル4のクラスは「英検3級レベルの基礎的英文法を修得する」ことが学習内容・目標である。従ってその目標に沿った内容の教材を作成することが求められた。教材を作る際には45分の中で一つのテーマを完結させなければならないことが大きな制約となった。45分の授業時間はおおよそ、その日のテーマの説明と練習に30分、確認テストに10分、採点とマークシート記入に5分という構成になる。教材は30分でその日のテーマの説明と練習ができるように配慮し、確認テストは10分で解答できるように配慮しなければならなかった。レベル3とレベル4の教材は文法の基礎的知識の習得が主題となる。教材を作成する際の例文は様々な文法書にあるものを参照にはしたが、体育学部の学生が対象となるので、学生にとって身近なスポーツに関連する例文を作成するように努めた。その際、学内の様々なスポーツ競技を専門とする教員からそれぞれの競技で最近話題になっている事柄について情報を提供いただいたことは教材の例文を作成する際に極めて有益であった。スポーツに関連する例文は、従来の文法書の例文よりは、学生が身近に感じてくれていることが授業の中での反応から推察できた。スポーツの話題を例文にするとはいっても、スポーツ界も日々変化しており、1年前に例文で使用した事実がすぐに古い話題となってしまうことがしばしばであり、例文を常に更新する必要があることを痛感している。

○　［レベル5］

レベル5は「英検準2級レベルの基礎的英文法を学ぶこと」を目標とし、レベル4で学修した内容に間接話法、仮定法、間接疑問文、分詞構文を加えたものとした。学修する文法は、比較的短い文や単純な文をレベル5で学ぶこととした。作成に当たっては英文の選択など、宮城教育大学の板垣信哉先生を中心に4名の現役と元職の中学校高等学校の英語の教師の方々の御力添えを頂いた。各回の授業は次の4つの部分で構成されている。①その回で取り上げる文法が使われている例文を予習してきて学生が訳す。その後、教師による解説を行う。②スポーツに関する日本語の記事を学び、同時に記事中に出てくる単語を英語にする。③スポーツや健康増進などに関する英語の記事を読んで感想を述べる。④上記①②③に関する20ポイント満点の確認テストを行う。

①については、先に述べたようにそれぞれの文法事項を、短い文や単純な文で学べるようにした。Japan Timesのweb版で2016. 12.31～2017.1. 6に6回連続で連載されたNew Year's series examining how Japan is preparing for 2020 Tokyo Olympics and Paralympicsから選んだ。内容がすべてスポーツに関するものであり、同時に予算やオリンピックやパラリンピックの歴史、日本が期待していること、障害者の参加に関することなど多様な観点に触れている

ので興味を持ちやすいのではないかと考えた。

②については、レベル1で述べた「誤審のスポーツ史」を活用した。意図も同様である。

③については、英文を単文で理解するだけでなく、まとまった英文を読む機会がこのレベルには必要と考えて構成した。内容は学生が興味を持つように、スポーツや健康に関するものとした。出典はVOAのweb版Learning Englishを読みやすく改訂したもののうち2016.12.26～2017.6.15を使用した。ビタミンDのガン予防効果、高齢者のスポーツ活動、スポーツを通しての性差別改善、寒い時期のランニングの効果、肥満と長寿の関係、環境汚染と子供の死亡率などを取り上げた。

○　[レベル6]

レベル6は、「英検2級レベルの英文法を学修すること」を目標とした。レベル5で学修した文法を使った、修飾や挿入のある長い文や重文、複文を学修することにした。文に修飾が多かったり重文や複文を含んだりするなど文の難易度が高いものを学ぶようにし、同じ文法を繰り返し学習するようにした。レベル６でも英文の選択など教材作成に、宮城教育大学の板垣信哉先生を中心とした現役と元職の中学校高等学校の英語の教師の方々にご協力を頂いた。各回の授業は次の4つの部分で構成されている。①その回で取り上げる文法が使われている例文を予習してきて学生が訳す。その後、教師による解説を行う。②スポーツに関する日本語の記事を学び、同時に記事中に出てくる単語を英語にする。③スポーツや健康、医療などに関する英語の記事を読んで感想を述べる。④上記①②③に関する20ポイント満点の確認テストを行う。

①については、先に述べたようにレベル5で学んだ文法事項を、長い文や複雑な文で学べるようにした。Japan Timesのweb版で2016. 12.31～2017.1. 6に6回連続で連載されたNew Year's series examining how Japan is preparing for 2020 Tokyo Olympics and Paralympicsから選んだ。内容がすべてスポーツに関するものであり、同時に予算やオリンピックやパラリンピックの歴史、日本が期待していること、障害者の参加に関することなど多様な観点に触れているので興味を持ちやすいのではないかと考えた。

②については、レベル5で述べた「誤審のスポーツ史」を活用した。意図も同様である。

③については、英文を単文で理解するだけでなく、まとまった英文を読む機会がこのレベルには必要と考えて構成した。内容は学生が興味を持つように、スポーツや健康に関するものとした。出典はVOAのweb版Learning Englishを読みやすく改訂したもののうち2016.12.26～2017.6.15を使用した。介護や医療用のロボットの開発、チェルノブイリ原発事故の跡地利用、健康と睡眠の関係、インターネットを使った手術、刑務所内の更生のための職業訓練などを取り上げた。

○　［レベル7］

レベル7に関するクラスの学習内容･目標は「英検準１級レベル（TOEFL iBT 87～109）の英文法を修得する」ことである。従ってその目標に沿った内容の教材を作成することが求められた。教材は様々なスポーツのテーマに沿って、１回目から12回目まで学習する。教材の内容は3つに分かれている。スポーツ関連の記事･英検準１級の問題･TOEICの問題である。学生はスポーツを教材とした英語の記事から英検準１級レベルの英文法を修得する。学生には教材の内容を把握できるよう事前に予習プリントを配布する。予習をしてきた事で確認テストの結果に影響も出た。上級レベルの事もあって、内容がそれなりに深く専門用語の英単語･熟語が多い内容の記事になっている。予習してきた学生、予習が出来なかった学生に内容を適切な時間内でどれだけ理解させられるかが大事な目標と課題であった。授業全体として充分な時間を確保し、より良く教材の内容を理解できるように様々な工夫をした。授業開始前には拡大した予習記事を分かりやすく赤、黄色、青でハイライトする。スポーツイディオム･熟語、句動詞には特にハイライトをする。その他下線を引いた記事に関連する重要なスポーツの専門用語にも注目させる。記事のハイライトを分かりやすく英単語

から日本語訳を説明する。さらに英文の記事からポイントになる英文法を分かりやすく日本訳で説明する。授業の全体の45分のうち30分はインフォメーションギャップを埋める作業になる。学生は予習してきた内容を確認しながら、記事に関するハイライトを元に確認テスト20分前に最終確認をする。確認テストに与えられている時間は記事の内容により5〜7分確保する。テスト終了後確認テスト、解答用紙、マークシートを提出し授業全体を終える。学生には事前に次の授業の予習課題のプリントを配布する。

⒳ 授業担当の立場

○　教員Ⅰ

初年度の「総合英語Ａ」ではレベル3の教材を使用した。翌年前期の「総合英語Ｂ」ではレベル４の教材を使用した。また後期の総合英語Ｃではレベル3の教材を使用した。レベル3のクラスは「英検4級レベルの基礎的英文法を修得する」ことが学習内容・目標であり、レベル４のクラスは「英検3級レベルの基礎的英文法を修得する」ことが学習内容・目標である。プレイスメント・テストを実施したことにより、対象学生のレベル分けが為された結果、ほぼ同レベルの学生を対象とすることになり、授業を担当する立場として、授業運営がやり易くなったことはこのカリキュラムの長所として挙げることができる。私が担当した学生は、本学の中では英語について少しの知識は持っているものの多少の苦手意識を持った中間層の学生といってよいかと思う。英語の必要性について意識している学生も中にはいるが、英語以外の事柄に関心を持っている学生が大半である。その状況の中で、45分という短い時間で英文法の特定のテーマについて集中的に学習する方法は、従来の90分単位の授業よりも学生にとって集中力の持続という観点から有意義であったと思われる。担当したレベルと教材に関しても学生たちは教材の内容に十分ついてこれたと思う。

総合英語Ｃ（レベル3）での担当学生は、英語についての苦手意識が極めて強い学生である。しかし「英検4級レベルの基礎的英文法を修得する」ことが目標であるレベル3教材について、時々「難しい」といった発言が聞かれたが、何とかついてこれた学生が大半であった（受講生合計85名中71名が単位を修得した。修得できなかった学生14名中、11名は欠席日数が理由であった）。総合英語Ａ（レベル１）と総合英語Ｂ（レベル２）での学習が功を奏した結果であるものと思われる。45分の授業時間はおおよそ、その日のテーマの説明と練習に30分、確認テストに10分、採点とマークシート記入に5分という構成になる。まず担当者自身がその時間構成に慣れる必要があり、時には時間を超過する場合もあった。学生は回を重ねるごとにその時間構成に慣れて行き、概ね45分間を集中して授業に取り組んでくれた。一方、タイトな時間的制約のため、テーマに関する脱線した話をしたり、学生自身が自ら解答を発見するのを待っている余裕がないという側面があることは否めない。また、毎回のテーマは事前にシラバスや初回の授業のオリエンテーションで示しているが、学生がその日のテーマに関して事前に予習をしている様子は残念ながらあまり見られなかった。自分が既に持っている文法書や参考書でよいから、その日のテーマについて必ず予習するように促す必要があるものと思われる。また、予習をしないのは、その日のテーマに関する教材を当日配布していたのがその原因の一つとも思われる。次回のテーマの教材を前の週に配布し、予習をするように促すことが打開策の一つと考えられる。

○　教員Ⅱ　（レベル1・レベル6）

［レベル分けは妥当か］

私はレベル1とレベル6の授業を担当したので、その経験をもとに述べていく。

レベル1においては、英語に関して苦手意識の強い学生が多く、特に始めの回のころは学修に興味が持てないような学生が多く見られた。学修が進むにつれて、授業の進め方が理解されて、課題については意欲的に取り組む学生が増えた印象である。スポーツをやってきているだけに、課題がはっきりすると取り組みも良くなるようである。基礎的な単語や表現から学べるようにしたため、英語の得意でない学生にも比

較的取組みやすかったように見えた。一方で、出席率を見ると、英語の学修自体には苦手意識が強く、あまり良好とはいえない回もあった。全体を振り返ると、レベル分けと教材の内容は適切であったように思う。レベル6においては、英語の苦手意識の強い学生はあまり多くなく、全体として予習に取り組む学生が見られた。しかし、数は多くはないが苦手意識の強い学生もおり、できればもっと下のレベルで学修を行いたいと申し出る学生もいた。そもそも、英語を学修するために本学に入学する学生はいないと考えられるので、全体としては教師が学修をしっかりさせ英語力を高めるという印象が強い。一方では、学修をした分英語力が付くのも事実であり、学生は「学期の初めより力が付いた」と述べる学生もいた。毎時間学生に指名し予習してきた訳を答えさせるので、教師の解説に熱心に耳を傾ける者が多かった。（総合英語Ｃより総合英語Ｂの時の方が、予習者は多かった）授業中にうなずきながら聞いている場面もあり、例文の選定が良かったように感じた。また、教師の訳より日本語としてこなれた訳を答える学生もおり、教える側にも興味深い授業となった。更に、VOAの記事については、英文がそれほど難しくなく内容の選定も良かったのか、興味を持つ学生が見られた。一方、文法理解についていえば、関係代名詞などをすべて制限用法にして訳してしまうことや分詞構文の訳し方がぎこちないなどの特徴も感じられた。更に、単文と複文が組み合わされた文や複文と複文が組み合わされた文、修飾の多い文などの複雑な文は、理解が難しいということも分かった。このレベルの学生には、単語やイディオムを、辞書などを使って調べることにより自学で力を伸ばすことができる学力が付いていると思われるので、習熟度に合ったクラス編成をしたのは学生にとって有意義であったと思う。

［確認テストの妥当性について］

どちらのレベルでも予習してくれば授業の理解が深まり、学修した課題について問うテストになっているので、結果がはっきりと出るため、集中して授業に取り組むようになった。確認テストの妥当性は高いし、予習→確認→解説→確認テストという学修のサイクルも有効に機能していると思われる。

［全体としてのクラスを教えての感想］

レベル１とレベル6というかなり違ったレベルの学生に授業をしていると、学生の習熟度や意欲、必要感をきちんと踏まえて教師が学修の要求をすることが大切だと感じている。そもそも英語を学修することを願って入学してきていない学生に、いかに必要性と有用性を感じさせるかがカギとなるように感じる。例えば、各種の英語資格への取得意欲という点で見ると、一番上のレベルのクラスは資格取得に「やや関心がある」と「関心がある」を合わせると、74名中43名が意欲を示している。しかし、二番目のレベルのクラスでは、81名中27名が意欲を示しているのみである。一例を挙げたが、この他にも学生との会話などを通してみてみると、学生個々人の意欲や必要感はかなり違っている。なお、レベル6の授業では、全ての教材を授業で取り上げることが難しく、英文の解説に多くの時間を費やした。教材をすべてやりきることより、英文を理解する力をつけることを優先し、自学自習に取り組める道筋をつけることに力を注いだ。全体としてみると、習熟度別にクラス編成したことは、学生にとって非常に有効だったと思うし、私たち教師にとっても、経験に照らし合わせて教材や教え方の改善を今後とも積み重ねていくことが大切であると思う。

○　教員Ⅲ　（ネーティブ・スピーカー）

レベル2の学生の主な焦点は、さまざまなスポーツのトピックからスポーツ関連の語彙を習得することです。学生に提供され、教えられる内容は、言語習得の4つの基本的な要素（読み、書き、聞き、話す）の総合的能力の向上である。クラスの管理は次のとおりです。学生は各自の辞書を持参する必要があり、規制としてスマートフォンは授業開始前に電話を切るように指示されています。その後今週の話題が議論され、学生は次の45分間の全体的な期待について話を聞く。授業外課題である語学学習システムを積

極的に活用するように毎回告知する。学生は仙台大学のポータルサイトにアクセスして語学学習システムを通してオンラインで整理された問題を解決するときにマイル・ポイントを獲得します。語学学習システムから獲得したマイル・ポイントは15回分の科目の確認テストのポイントと加算される。

授業構成は次のとおりです。学生は最初の12分間、週のトピックに関する資料を読み辞書を使って読解する。学生は英語から日本語に、慣用句、スポーツ用語、および様々なスポーツの中で、ならびに日常生活の中で使用される句から10問の文を翻訳する必要があります。次の8分間は全体の問題の中から半分、私の方から英語と日本語で学生に文を読み聞かせ、文の説明をする。学生は読み上げられたこれらの文章を自分の答えと比較して、インフォメーション・ギャップがあるか確認しながら話を聞く。その後学生は問題練習の解答用紙を受け取り、資料からの情報のギャップを比較して記入します。次の5分は、学生が日本語でスポーツ記事を読み、その記事にある10の重要な用語を記入し、それらを日本語から英語に翻訳するために割り当てられます。次の3分間は、これら10の重要な用語を読み、説明し、学生が情報のギャップを埋めるために割り当てられます。最後に確認テストを行います。テストには3〜5分間掛かります。テストは交換され、提供された解答用紙を使用して、隣に座っている学生によって採点されます。最後に、テスト結果をマークシートに記入します。確認テスト、解答用紙、マークシートを提出し授業全体を終えます。

レベル7の学生が焦点を当てている分野は、主に英語と日本語の記事から「英検準1級レベルの英文法を修得する（TOEFL iBT 87〜109)」ことです。学生に提供され、教えられる内容は、言語習得の4つの基本的な要素（読み、書き、聞き、話す）の総合的能力の向上である。クラスの管理は次のとおりです。学生は各自の辞書を持参する必要があり、規制としてスマートフォンは授業開始前に電話を切るように指示されています。その後今週の話題を議論され、学生は次の45分間の全体的な期待について話を聞く。授業外課題である語学学習システムを積極的に活用するように毎回告知する。学生は仙台大学のポータルサイトにアクセスして語学学習システムを通してオンラインで整理された問題を解決するときにマイル・ポイントを獲得します。語学学習システムから獲得したマイル・ポイントは15回分の科目の確認テストのポイントと加算される。授業構成は次のとおりです。上級レベルに基づいて、学生はスポーツ・健康、および独自のトピックに関する記事を事前に予習する必要があります。それぞれの記事を前以て予習する事によって、学生が授業にスムーズに専念出来る事が狙いである。担当教員は学生が全体的な内容をよりよく理解して準備するのを手助けします。授業開始前には拡大した資料を分かりやすくハイライトする。例えば下線を引いた記事に関連する重要なスポーツの専門用語を下線したり、熟語・句動詞に関しては色別にハイライトをする。授業の最初の5分は、学生がこの拡大された記事を確認しながら予習用の資料に下線とハイライトをする。次に担当教員が5分間、記事を読み上げます。読み終わった後、記事のハイライトされた内容と文法のポイントに注目しながら肝心なポイントを学生に日本語で説明しながら学生は20分間メモを取ることになっています。次の5分間は、学生にインフォメーションギャップがあるかをノートで確認し、テスト前に準備として記事に関する質問の時間を設ける。

テストの内訳は以下のとおりである。テストに与えられている時間は5〜7分。終了後、テストは交換され、提供された解答用紙を使用して、隣に座っている学生によって採点されます。最後に、テスト結果をマークシートに記入した後、確認テスト、解答用紙、マークシートを提出し授業全体を終えます。学生には事前に次の授業の予習課題のプリントを配布する。

総合英語Ｃレベル７の担当教員として教材作成の立場を振り返るとしたら反省すべき部分もある。上級レベルである以上学生には出来るだけ英文の記事を全体的に理解してもらいたかった。45分という時間の中で学生は良く内容深い記事を30分以内で纏めようとしていた様子を感

じた。記事の中身がかなり多い内容で無理な部分も多少あったが、上級生として当たり前だと思った。授業の担当者として記事全体としての説明と内容は欠かせなかった。記事を省略することにすると、記事全体的のメッセージが失われるからだ。学生にはそのせいで負担をかけたのはまちがいない。修正をしながらより分かりやすく学習をサポートしていきたい。

○　教員Ⅳ　（非常勤）

レベル4のクラス編成、レベル分けについては、概ね適切であると感じました。基礎的な文法の説明が中心でしたが、ほとんどの学生が授業に集中し、確認テストに取り組んでいました。また、基礎から文法をもっと勉強したいという学生が何名かいました。レベル2のクラス編成、レベル分けについては、特に問題ありませんでした。確認テストについては、基礎的なことがわからず並べ替えや記述問題に苦労した学生もいましたが、概ね授業を真面目に受けて合格点を取っていました。レベル5は、英文の分量が多く、また複雑な英文が多かったため、クラスにとっては授業時間内に訳を完了させるのはかなり厳しかったです。文法事項も時間がたりず授業中にきちんと説明できなかったため、確認テストのため模範解答を暗記するだけという学生もいました。英文の内容（記事の内容）については、オリンピック関連ということで、皆非常に関心をもっていたようです。

レベル分けの妥当性に関しては、1, 2名下のクラスへ移動したいと希望する学生がいましたが、実際はついていけないということはありませんでした。教材が難化していくと、同じクラス内でも英語の読解力に差が生じ、単語がわかっても英文を和訳できない学生が数名いました。

○　教員Ⅴ　（非常勤　レベル3・レベル4）

クラス編成は，概ねレベルがあっており，英検4級程度の学習内容を消化することができた。授業態度も良かったが，体育学科専攻の方が他の学科専攻学生よりモチベーションが高いと感じた。レベル3に関して言えば，多少の英語の実力差より，将来における英語の必要度や，学生自身の生活の充実度などの要素の方が，英語の学び直しにかける期待値や学習態度に結びついていると感じた。ノートテイキングもよく出来ていたクラスであった。次のステップに進むと，学生は最初，レベルが4に上がったことに戸惑っていた。半年英語を勉強しただけだからレベルを上げてくれなくていいと話す学生もいた。実際始まってみるとレベル3と4は、難易度は大きく変わらず，レベル3で勉強した文法をスパイラルに理解を深めていく，という私の説明に納得してくれたようだった。ノートテイキングは出来ないのか意欲がないのか理由は不明だが，行う学生が前のクラスの半分くらいだった。同じクラスの中で多少の学力差があるのは，学生本人が自分のレベルに納得していれば，クラス全体の雰囲気として悪くはなく，必ずしも英語力が均一でなくても良いと考える。そういう意味でもレベル分けは妥当であったと思う。

確認テストは、基本的に直前の授業で勉強したばかりの内容が出題されるので，学生は授業のポイントのつかみ方やテキストの読み込みの要領を理解して，授業に集中することが出来た。ただ，確認テストの難易度は毎回同じではなく，適語選択や正誤問題は易しく，語順並べ替えや和文英訳に問題にはお手上げという学生が一定数いた。確認テストの前に数分の暗記タイムがほしいという学生の要望には，ほぼこたえられなかった。私の担当内容は，中高の文法の学び直しであり，忘れていたり，理解しそびれていたりしていた文法への気づきや，英語そのものの記憶の再生だった。しかし「あーそうだったのか！」という学生の理解が，必ずしも確認テストにそのまま反映されるとは限らないこともあった。とはいえ，確認テストは最大公約数的な理解確認の手段として必要であり，適切だったと思う。学生も確認テストがあることを肯定的に受け止めていた。このレベルの学生は，基本的な力は持っているが，しばらく英語学習から離れていたことで，基本文や単語を単純に忘れている。しかし集中的な学習時間の確保と反復練習があれば，英語の輪郭を思い出し，文法を再構築できる。従って，「総合英語」の履修により，学生の英語力は上がったと考える。

1年半担当させていただいた。テキスト作成から確認テストの採点処理および出欠確認や評価まで，専任教員にお世話になり，心より感謝している。これまで3回の担当替えがあったが，私はレベル3と4の担当となり，同じ教材を使うことで前回の反省を生かすことができ，結果的にとても良かった。クラス編成が同じなら，担当者は半年毎に変わる方が，担当者・学生ともに新鮮だと思う。

○　教員Ⅵ　（非常勤）

レベル4とレベル5の教材のギャップについては2つの観点から考察してみたいと考えます。1つは教材の種類で、もう一つは語彙レベルです。一つ目の教材の種類については、レベル4では確認テストを見る限りでは英作文の力をつけさせる内容となっております。そして私が2年間担当させていただいたレベル5の内容は専ら英文読解となっております。ここに学生がやや戸惑う原因の一つがあるのではないでしょうか。それではどうすればよいのか。そこで各レベルの教材の流れをざっと見てみます。各レベルの教材のねらいを考えるには、確認テストを見てみるのがよいと思われます。なぜならば、それらのテストには学生にどういう英語の力をつけさせたいのかが表れているからです。そういう観点で見ていくと、レベル1は日本語から英語への語彙力、レベル2は英語の語句から日本語への語彙力と日本語から英語への語彙力、レベル3は英文の完成、そしてレベル4はほとんど英作文となっています。全体の流れは語レベルから、句レベル、そして文レベルへという流れになっています。そしてレベル5でがらりと変わって英文解釈となるわけです。しかしここで気が付くことは、レベル2にだけ見られる、英語の語句から日本語への変換という内容です。そしてそのテスト内容に該当する教材を見てみると英文読解に関わるものになっています。ということはこの部分を、語句のレベルを調整してレベル4にもってくればレベル5への「橋渡し」となるのではないでしょうか。またそうすればレベル4の前半分までは基礎的文法を学んで語彙力や作文力をつけるという流れがすっきりしてくるのではないでしょうか。

二つ目の語彙レベルについては、上記のことに鑑みれば、繰り返しになってしまいますが、レベル4の後半分の英文読解の部分の語彙レベルを、レベル5への「橋渡し」のレベルまで上げれば、レベル5以降の学習につながっていくのではないでしょうか。学生はレベル5の英文のレベルにギャップを感じているようですから。今のところこのようなことしか考察できませんが、やはり「教材は授業を支配」するものと考えます。

(iv)　ネーティブ・スピーカーの立場

コンパクトサイズのキャンパスに約2500人の学生が通う仙台大学は、国際交流の経験が豊富な大学です。現在、アジア、ヨーロッパ、北米、オセアニアと世界的に広がる協定校のネットワークにより、海外の多くの学生とつながることができます。第二言語、特に英語を習得した場合に得られる利点は、新しい友情、新しい文化の習得、そして自分自身を再発見し、さらに自分を磨く方法などを学ぶ機会が学生にはたくさんあります。2017年度から新しい英語教育「総合英語」が実施されたことで、1年生から3年生まで学生英語の4技能である読む、書く、聞く、話す4つの基本的な要素に基づいて効果的な教育プログラムを受けることができます。コンパクトな大学ながら、仙台大学には3人の英語のネイティブ・スピーカーがおり、それぞれ日本で長年の経験を持ち、専門分野を英語で教えてきました。同じ現場で3人ものネイティブ・スピーカーがそれぞれ持ち味を出しながら仕事がこなせる環境は中々、他の大学にあるとは思えません。仙台大学の学生は、英語のネイティブ・スピーカーから貴重な人生経験を学ぶことができます。私の見解では、「総合英語」は効果的なプログラムで、あらゆるレベルの学生に対応しています。全ての受講生は1年生としてプレイスメント・テストを受け、テストの結果を元に5つの異なるレベルで学生の割り当てが決定されます。5つのレベルに準備されたクラスは6つで、各クラスは約20～25名の少人数で構成されています。各レベルに割り当てら

れた教員は、すべてのレベルで教える上で優れた経験と経歴を持っています。すなわち、学生はあらゆるレベルで安心して授業を受けることが出来るのです。「総合英語」は、必修科目としての3年間の間に、英語の4技能である読む、書く、聞く、話す総合的能力を向上させるための新英語教育と言えます。英語のスキル向上につながる大事なポイントは、授業に取り込むトピックです。「総合英語」ではすべての授業でスポーツ関連のトピックを実施することになっています。スポーツ科学大学である仙台大学の学生は、スポーツを題材としている教材に非常に関心を持っているため、スポーツ関連のトピックが彼らをやる気にさせるのに役立っています。私はまた、授業全体の時間が教材に適していると思います。学生にはレッスンの目標が各クラスの初めに伝えられ、積極的に学びその週の授業の目標を達成するために、与えられた45分以内に課題に取り組むことになります。その上で時間の管理も非常に重要です。アクティブ・ラーニング学習アプローチでは、学生は45分以内にその日のトピックに関連する英単語や、コミュニケーションの基本的能力を習得します。45分間、学生は継続して授業内容に必死に取り込む時間構成は、限られた時間内で積極的な英語学習を楽しくすることが「総合英語」のポイントだと思います。

おわりに

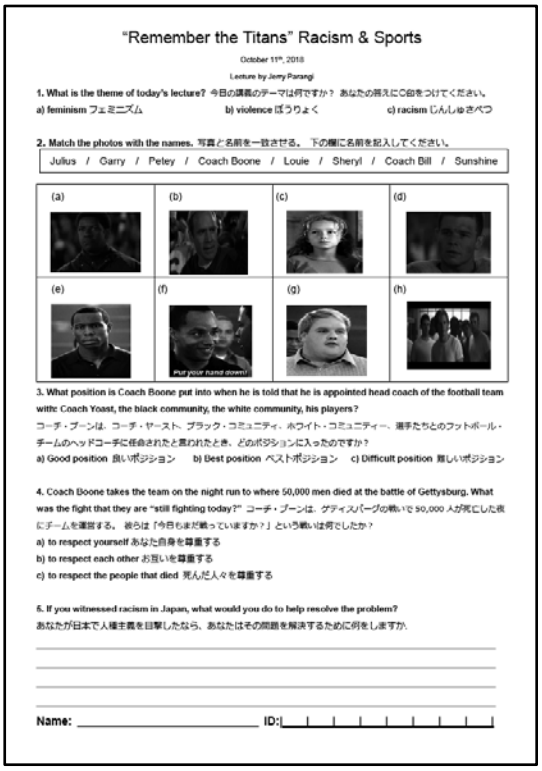
今後、新しい英語教育体系のうち、「総合英語」が完成年度を迎える2019年前期の終了時点で、統計的エビデンスを整理したものを第2報として、また、新体系の対象学生1期生が選択科目群の掉尾となる「就職のための英語」授業の履修を終了した時点で、ＰＤＣＡサイクルの視点からの自己評価・評価結果を第3報として、それぞれ、世に問う予定であるが、本稿出稿時点では、一応、想定している効果を齎すのではないかと考えている。

最後に、本稿作成に協力頂いた「総合英語」の授業担当非常勤講師であられる宮野、志子田、大曾根の各先生に謝辞を記して、第１報を閉じる。

平成 30 年度「スポーツに何故英語が必要か」スライド一覧（1 枚目のみ）

9 月 29 日　オリエンテーション

10 月 4 日

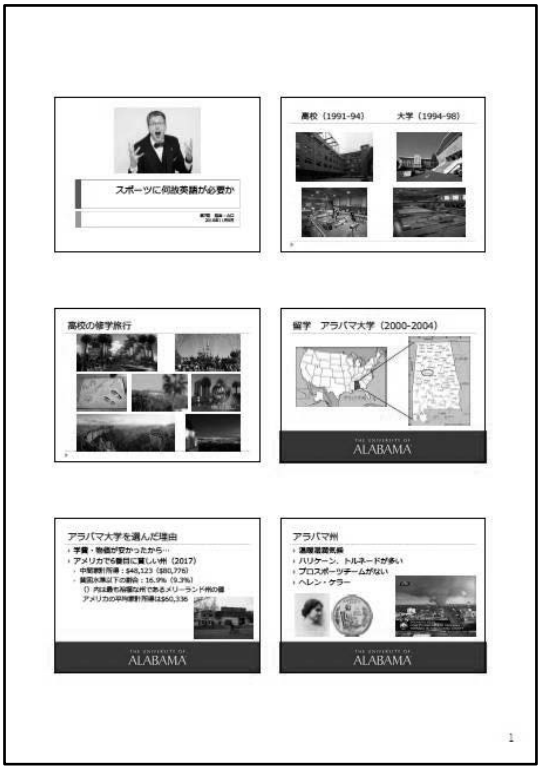


10 月 11 日

10 月 18 日

10 月 25 日

11 月 1 日



11 月 18 日

11 月 22 日

11 月 29 日

12 月 6 日

12 月 13 日

1 月 10 日

1 月 17 日

（2019年　３月11日受付
2019年　３月19日受理）